

# 『主体的・対話的で深い学び』を実現するための実践研究事業」授業研究会レポート No.5-①

## 四万十市立中村中学校 授業研究会

平成30年6月19日（火） 社会科 第2学年

「日本の地域的特色と地域区分」 立石 和仁 教諭



授業改善を確かな形にするために、新たな学び場がスタートしました。本授業研究会は、これからの「高知の授業づくり改革」に向けて、こういった視点が大切なのかを参加者と共有し、明日からの授業づくりの方向性を確認するとともに、主体的・対話的で深い学びの実現に向け、授業の質を高めることを目的としています。

### 本時の目標

30年後の少子高齢化の世の中を想像し、将来の自分と向き合い、考え深めることができる。

### 授業の視点

\*現在の四万十市の実態から課題を見だし、2050年の四万十市を住みやすい街にするために、どのような方策があるか考えることができるか。

### 最終板書

19 問題  
(\*) めあて

30年後の私の生活を考えてみよう  
30年後の自分は少子高齢化社会とどのように向き合いますか？

① 30年後の将来にはどのような現実がまていだろうか？

- ・高速なロボット化
- ・年金がたくさんいるため労働者の税の負担が増える
- ・子どもが少なくなるので登下校中の元気な声か減り、声の活気がなくなる
- ・仕事がない
- ・外国人が来る
- ・子どもが減って教育費が減り高齢者の介護にまかせる
- ・地震が起きている。

② 2050年、あなたならどう生活しますか？

2000 2020 2050

性別	0歳	15歳	20歳	65歳	75歳
男性	1823人	11834人	2922人	11946人	2756人
女性	2823人	11946人	2756人	11834人	1823人

性別	0歳	15歳	20歳	65歳	75歳
男性	1877人	8284人	5159人	8320人	7064人
女性	1806人	8320人	7064人	8284人	1877人

性別	0歳	15歳	20歳	65歳	75歳
男性	1217人	5064人	4468人	5227人	5809人
女性	1153人	5227人	5809人	4468人	1217人

四万十市の中学校生徒数の比較

少子高齢化

ここがポイント!

地理的分野においては、空間的相互関係に着目することがポイントです。そして、大事なことは、地域の特異性と共通性です。つまり、一方では特色があるが、一方では似ているものがあるという“見方”を育てていくということが大切です。そのためには、比較対象となる資料が必要です。比較対象をもってくことにより、“地理的見方・考え方”を鍛える場ができます。

また、資料というのは、生徒の多面的・多角的考察を支えたり、公正かつ公平な選択や判断を支えたりするための根拠にすることが重要です。つまり、資料を与えてから「何が見えるか」という授業から脱却し、自分の考えを説明する根拠として資料を使うようにすることが大切なこととなります。





## 協議の視点

\*各教科における「見方・考え方」を働かせた授業づくりへのアプローチは、学びに向かう生徒の中に上手くあてはまっていたか。

### 授業リフレクション

## 見方・考え方をいかに鍛える指導をするか

授業リフレクションでは、「生徒のつぶやきをひろい、それをもとに議論を進めていくことで主体的な学びができるのではないか。」「他教科の見方・考え方を把握し、一貫した指導をしていかないといけないのではないか。」「小学校がどんな学びを積み上げてきたか、教える側がそれを理解していないといけないのではないか。」などの意見が出されました。

社会科の地理的分野においては、事象に対して、位置や空間的広がりに着目する中で、人間の営みに関連付けながら、多面的・多角的に考察し、さらには公正・公平な選択や判断、議論をしていくことが大切です。つまり、この視点から授業をつくっていく必要があります。

数学科においては、教材とどのような形で出合わせて、その教材をどう解釈していくか、そこをもっと丁寧にやっていくことが大切です。何に目を付けて考えていくのか、“着目する眼”を育てていくことを意識した授業づくりが必要です。

音楽科においては、「見方・考え方」を生徒が自覚しているかどうか重要です。生徒がこの「見方・考え方」を働かせることで、



音楽の学習活動の質的転換を図ることができます。

## 本当に“内容”を教えていたのか？

内容の深い理解を図るプロセスの中で、能力を育成するということが大切です。つまり、従来いわれてきた「内容」の指導をもっと徹底するという事です。

大事なことは、内容を深く理解していくプロセスの中で、本来、教科で身に付けていかないといけない能力を獲得していくということです。すなわち、能力ベースの授業づくりの“プラスα”というのは、必ずしも、最後のまとめに何か新たなる一文を加えるという話ばかりではないということです。



## “生徒のニーズ”に応えるとは…

目の前の生徒は、一人で全教科を学んでいます。つまり、教科を超えて、全教科が同じスタンスで、授業改善、授業改革を進めていくことが重要です。

今、全ての先生方で、目の前の生徒の“次代をよりよく生きたい”というニーズに応えることが求められています。



## 提案授業から見てきたこと

- 本時では、人口問題を「位置や空間の広がり」という点で、四万十市と他地域や高知県、日本そして世界と比較することで、もっと課題に深く迫れたのではないかと感じています。
- 問題から何に着目するかで授業の内容は大きく変わってくるようになりました。今後、多面的に問題場面を見られる授業を展開できるようにしていきたいです。
- 楽譜のもっている価値を問うことの大切さを再認識できました。また、生徒自身が感じ取った価値を音楽によって表現するために、1年からの技能の習得も重要であると感じました。



立石 和仁 教諭



岡田 紘典 教諭



山本 奈々枝 教諭

## 参加者の声

- 生徒の思考の流れをつなぎ、生徒と教師間のギャップをつくらないようにしたいと思います。
- 共通事項のどの構成要素を学習の支えとするか、しっかりと焦点化して授業を組み立てていこうと思いました。
- 教科主任として、社会科の見方・考え方とは何かを再度捉え直し、チャレンジしていきたいです。
- 資料から答えを導くだけの授業から、自分の考えをもたせるための資料活用を目指していきたいです。
- 積極的に他教科の授業を参観し、自分の中の見方・考え方の視点を広げていきたいと感じました。
- 他教科の学び方やどんなことを学んでいるのかを知り、自分の教科に取り入れられるところを取り入れていきたいです。

## check!

次回 平成30年8月29日(水) 教材研究会 13:20から 数学科、国語科、英語科